

『紫式部日記』における対『枕草子』意識

——藤原齊信関連記事をめぐって——

金 孝 淑*

(e-mail : hyosookk@freechal.com)

目 次

- 一 はじめに
 - 二 消息文的部分の中の清少納言批判——文の流れと藤原齊信——
 - 三 『枕草子』の中の藤原齊信
 - 四 『紫式部日記』の中の藤原齊信
 - 五 むすびにかえて——日記文学というもの——
-
-

一 はじめに

平安時代のかな散文文学の双璧と評される紫式部と清少納言は、“ライバル”と位置づけられ、その作品の特質から個人の性質にまで及んで多面的に比較検討されてきた。それは、その二人がそれぞれ彰子と定子の後宮に仕えた女房であるという歴史的事実や、また『源氏物語』や『枕草子』という作品の相違点に因るものであろうが、さらに『紫式部日記』に見える清少納言批判文の存在に起因するといっても過言ではあるまい¹⁾。

* 培材大学校 非常勤講師 日本古典文学専攻

- 1) 『紫式部日記』の対『枕草子』意識に関しては、例えば、妹尾好信氏は、両作品の最大の類似点を「両作品ともそれぞれの属する後宮サロンの素晴らしさを筆に尽くして書こうとしているところだ」と指摘し、さらに「道長は、父道隆を失い、みじめな境遇で皇子を出産しなければならなかった定子のことを思いながら、我が子彰子の出産を一大イベントとして後世に伝えるべく、紫式部日記を記録させたのであろう。それは『枕草子』が書き得なかった中宮サロンの盛儀であった。そして、紫式部は、中宮の出産前後のルポに留まらず、彰子後宮のありさまをあれこれ随筆風に綴ったのであるが、おそらくこれも、『枕草子』を読んでおり、これを強く意識して日記を綴ったものと思われる。『紫式部日記』が書かれた寛弘年間にはすでに定子はこの世になく、清少納言も宮廷から退いていたはずであるが、世に歩き始めた『枕草子』は、定子の崩御後も宮廷に多くの読者を得ており、憧憬とともに愛読されていたものと考えられる。紫式部は、今は亡きライバル定子のサロンのことを強く意識しつつ、『紫式部日

従来、この有名な『紫式部日記』における清少納言批判文に対しては、様々な側面から論じられてきた。とくにもっとも問題となっているのは、この日記が書かれたと推定される寛弘年間には定子はすでに亡くなっており、従って清少納言も宮廷を去っていると推定されるが、そうすると、「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人」（202頁）²⁾と始まり、その末尾には「そのあだになりぬる人のほて、いかでかはよくはべらむ」と、その零落までも予言するような厳しさが、面識のない過去の人間に対して果たして可能なかということであった。この問題に関連して、山本淳子氏は、「定子は生前から周辺貴族層に明るく美しいイメージを与えており、死亡後はそれを保ったまま同情の念で迎えられた。そこに『枕草子』日記的章段が執筆・流布され、定子の理想的后妃としての幻想化をさらに促した。それは彰子および彰子付き女房群にとっては、後宮およびその周辺貴族の人心をいつまでも定子時代につなぎ止め、彰子の中心化を阻む障害であった。彰子女房紫式部は、この障害を除去すべく、清少納言、ひいては『枕草子』を否定、それによって世の定子時代懐古の阻止を図った」³⁾と述べられている。氏は、紫式部の清少納言に対する私的な感情に加え、彰子の後宮女房であるという公的な立場が、あの手厳しい批評を書かせたと解されているのである。また、上村悦子氏は、定子所生の敦康親王が定子崩御後、彰子の許で養育されたことから、清少納言も敦康親王付きの女房として宮中に留まっていた可能性を提示されている⁴⁾。さらには、近年、『紫式部日記』に見える女房の名前が、主上・中宮・道長家のどちらに所属しているのか明確に区別できるように書かれているとし、清少納言の名が彰子後宮に仕えていた和泉式部・赤染衛門とともに配列されていることから、清少納言も紫式部とともに彰子付きの女房として奉仕していた可能性を示唆する論考もある⁵⁾。これらは、清少納言批判文を、紫式部の個人的な感情だけではなく、後宮女房という歴史的な事実から読み解こうとしたものだが、『紫式部日記』が紫式部という個人の日記ではなく、敦成親王の誕生から筆を起し、その賛美に多くの部分が費やされているということを考え合わせると、示唆するところが大きい。

ところで、このような視座に立って、清少納言批判文に至るまでの一連の記事を読み進めていくと、そこには後宮サロンの雰囲気の評価する人物として藤原齐信が登場していること

記』を書かざるを得なかったわけなのである」と論じられている。「後宮プロパガンダとしての『紫式部日記』——その対『枕草子』意識——」（『国語の研究』第十八号、1993年、大分大学国語国文学会、pp.2~5）

- 2) 『紫式部日記』の本文の引用は、小学館「新編日本古典文学全集」による。ただし、私に表記を改めたところがある。なお末尾に「新編日本古典文学全集」の頁数を付した。
- 3) 山本淳子「『紫式部日記』清少納言批評の背景」（『古代文化』第53巻 第9号、2001年、古代学協会、p.31）
- 4) 上村悦子「清少納言と紫式部」（『王朝女流作家の研究』1975年、笠間書院、p.232）
- 5) 大橋清秀「紫式部日記にみえる清少納言について」（『帝塚山学院大学研究論集』第25集、1990年、帝塚山学院大学、pp.1~16）

に気づかされる。すると、ここには何か特別な意味が持たされているのではないだろうか。というのは、藤原斉信は『枕草子』において、たくさんの貴公子の中でもっともその登場回数が多く、清少納言との親密な関係が色濃く描かれている人物だからである。諸家によってすでに論じられているように、『紫式部日記』には対『枕草子』意識が強く表われており、紫式部が『枕草子』を読んでいるとするのであれば⁶⁾、清少納言の批判に至るまでの一連の記事の中で、『枕草子』の中でもっとも美しく華麗な姿で定子サロンを輝かせていた藤原斉信が登場しているということは、看過できない重要な問題であろう。本稿では、『枕草子』に描かれている藤原斉信を横目に睨みつつ、消息的部分の中で斉信が登場している意味、さらには『紫式部日記』の斉信の描かれ方を検討していきたいと思う。

二 消息的部分の中の清少納言批判

——文の流れと藤原斉信——

本節ではまず『紫式部日記』において、清少納言のことがどのような文脈の中で、またどのような形で記されているのかを確認したいと思う。『紫式部日記』もいよいよ後半部になると、若宮の戴餅の儀の様子が述べられ、それに勤めた女房達のことが語られる。そしてその女房達の様子を記しているうちに、筆はいつしか他の女房達に対する批評へと移っていく。そして、中宮彰子付きの女房に対する批評が済むと、次に引用しているように、齋院に勤める「中将の君」という女房に対して記していく。やや長くなるが消息的部分全体の流れをみるべく、以下に「中将の君」の記事から清少納言批評に至るまでの文を続けて掲げる。

①(a)齋院に、中将の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる、見はべりしに、すずろに心やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくこそ思うたまへられしか。……

6) 前掲の妹背好信氏や山本淳子氏の他にも、例えば、中野幸一氏は「道長は兄道隆の盛時に中宮大夫として定子中宮に奉仕し、中関白家の隆盛を目の当たりに見聞きて、中宮サロンの華やかで明るい雰囲気を実感している。……自らが中関白家を取ってかわった現在においても、かつての中関白家や定子中宮の盛時を明るく賛美した『枕草子』が後宮女性の間にもてはやされていたとしたら、道長ならずともこれへの対抗を意識せざるを得ないであろう。この対抗心は執筆を依頼された式部にとってはなおさらのことで、日記中に思わず清少納言に対する辛辣な批評を加えていることは周知のことであるが、他の叙述の端々にも『枕草子』を意識したと思われる表現が認められる」（『紫式部日記』「新編日本古典文学全集」解説、1994年、pp.243～244）と述べられるなど、『紫式部日記』における対『枕草子』意識はほぼ定説とみてよい。

げにことわりなれど、わがかたぎまのことをさしもいはば、齋院より出できたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはべらず。ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所のやうなり。……

されど、内裏わたりにて明け暮れ見ならし、きしろひたまふ女御、后おはせず、その御かた、かの細殿と、いひならぶる御あたりもなく、をとこもをんなも、いどましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば、すこしよろしからむと思ふ人は、おほろけにて出でるはべらず。心やすく、もの恥ぢせず、とあらむかからむの名をも惜しまぬ人、はたことなる心ばせのぶるもなくやは。(b)たださやうの人のやすきまに、たちよりてうち語らへば、中宮の人埋もれたり、もしは用意なしなどもいひはべるなるべし。上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りぎうずめきてのみはべるめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見はべり。……

(c)まづは、宮の大夫まるとまひて、啓せさせたまふべきことありけるをりに、いとあえかに兎めいたまふ上臈たちは、対面したまふこと難し。また、あひても何ごとをか、はかばかしくのたまふべくも見えず。言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにもはべらねど、つつまし、恥づかしと思ふに、ひがごともせらるるを、あいなし、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ。ほかの人は、さぞはべらざる。かかるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も、みな世にしたがふなるを、ただ姫君ながらのもてなしにぞ、みなものしたまふ。下臈のいであふをば、大納言ころよからずと思ひたまふたなれば、さるべき人々、里にまかで、局なるも、わりなき暇にさはるをりをりは、対面する人なくて、まかでたまふときもはべるなり。そのほかの上達部、宮の御かたにまると馴れ、ものを啓せさせたまふは、おのおの、心よせの人、おのづからとりどりにほの知りつつ、その人ないをりをりは、すさまじげに思ひて、たち出づる人々の、ことにふれつつ、この宮わたりのこと、「埋もれたり」などいふべかめるも、ことわりにはべり。

(d)齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。……

(e)和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。……

(f)丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりに、匡衡衛門とぞいひたる。……

(g)清少納言こそ、したり顔にしみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなるをりも、ものあはれにすすみ、をかきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

(193~202頁)

上記引用は、まず齋院に勤める「中将の君」が書いた「文」に対する論評から始まり、筆は自然とその「中将の君」が仕えている齋院方の様子へと移っている。そしてそこから紫式部自身が所属している彰子方の自己批判へと転じていく。とくに(b)の下線部では「ただ

さやうの人のやすきまに、たちよりてうち語らへば、中宮の人埋もれたり、もしは用意なし、なども言ひはべるなるべし」とし、彰子の後宮が世間から引っ込み思案であると批判されていることに触れられている。そして、そうした世間の認識を具体的に語る人物として、藤原斉信のことが引き合いに出されるのである。(c)の下線部は、「宮の大夫」つまり当時中宮大夫であった斉信に関連する記事だが、「まづは、宮の大夫まゐりたまひて、啓させたまふべき事ありける折に、いとあえかに兎めいたまふ上臈たちは対面したまふこと難し」云々とあり、斉信が訪ねてくるも女房達がまともに対応できないため、彼は快く思っていないとしているのである。また、「下臈のいであふをば、大納言ころよからずと思ひたまふたなれば」の「大納言」も斉信のことだが、然るべき女房がいないときは、応対に出る人がいないため、そのまま帰ってしまうこともあるという。ここでは、まず齋院方に比べ、彰子方は物事に消極的であること、そしてその雰囲気をも具体的に評価する人物として斉信のことが挙げられていることに注目したいと思う。

これに引き続き『紫式部日記』は、(e)「和泉式部といふ人こそ」、(f)「丹波の守の北の方をば」とあるように、和泉式部や赤染衛門について述べ、そして(g)「清少納言こそしたり顔にいみじうはべりける人」云々と、清少納言に対して極めて辛辣な批判を展開していく。この清少納言に対する批判は実に厳しいもので、『紫式部日記』全体の筆致とは異質なもののようにすら見えるのだが、先述したように『紫式部日記』における対『枕草子』意識を勘案すると、この文はただ単に清少納言という一女房に対する批評に終わるものではなく、『紫式部日記』という作品全体の観点から考える必要があろう。とくに、本節で検討している消息的部分は、それぞれ別の事件を書き記しているものではなく、一人の女房の批評から、その女房が属しているサロンに対する評価、そして式部自身が身を置いているサロンの自己反省、さらにまた別の女房批評、といったように、次から次へと有機的かつ連続的に移動していることから、一続きのものとして理解すべきであろう。こうした消息的部分のありように対して、豊田芳子氏は「日記は敦成親王誕生の記に続いて消息文体へと移っていくのであるが、ここから紫式部はいよいよ清少納言と正面から向き合う姿勢になっている。まず序奏として彰子サロンに身を置く女房達の批評から始め、次に齋院の中將の書簡を登場させて、その反論を長々と繰り広げて行く」⁷⁾と述べられ、『紫式部日記』が『枕草子』に対抗意識を持って書かれ、そして『紫式部日記』全体が連動していると述べられている。

このように、『紫式部日記』全体に『枕草子』に対する対抗意識が顕著であったこと、とくに消息文体の部分で最後の清少納言批評に向って連続的に書き進められていることを考え合わせると、その後宮文化を批評する人物として藤原斉信が登場しているということに関しても、その意味や必然性をさらに検討する必要があるだろう。言い換えれば、消息文の

7) 豊田芳子「紫式部日記小考——「清少納言批判文」の存在をめぐって——」（『王朝日記の新研究』笠間書院、1995年、p.572）

記事が清少納言批判を射程に入れて書き進められたとするならば、『枕草子』において定子後宮の華やかさを支え輝かせる人物として大いに活躍した斉信が、当該場面で他でもなく後宮サロンの批評者として現れていることは、極めて重大な問題であるからである。その登場の意味を探るべく、次節ではまず『枕草子』における斉信の描かれ方を確認していきたいと思う。

三 『枕草子』の中の藤原斉信

藤原斉信（九六七～一〇三五）は、太政大臣藤原為光の二男で、俊賢、公任、行成とともに一条朝の四納言と称されるなど才学に秀で、多くの漢詩文を残している人物である。また、政治家としての彼は、中関白家の道隆や、そして道長にも重用されるが、とくに道長の時代になると、彰子の立后にあたって中宮大夫として任ぜられる⁸⁾。

『枕草子』での斉信は、主に頭中将時代の逸話を中心に描かれているが、主君筋の一条天皇、中宮定子、伊周などを除けば、登場回数をもっとも多く、三巻本の「新編日本古典文学全集」で数えると、八章段に及んで登場している。その描かれ方は概ね清少納言の賛美の対象であったと言ってよいだろう。それではまず「心にききもの」段（一九〇）を見てみよう。

② 薫物の香、いと心にくし。

五月の長雨のころ、上の御局の小戸の簾に斉信の中將の寄りゐたまへりし香は、まことにをかしもありしかな。その物の香ともおほえず。おほかた雨にもしめりて、艶なるけしきのめづらしげなき事なれど、いかでか言はではあらむ。またの日まで御簾にしみかへりたり

8) 藤原斉信の人物像に対して、福井迪子氏は、『小右記』の記録を分析した上で、「ひたすらに執着心強く栄誉欲あり、多才で芸術家肌な感があるものの用意周到、着実、実務にも堪能な面が評価されるが、老年期に及んでは、無頓着さ・非礼が目立ち総じて我の強い複雑な人となりと比較的率直にあばき出された」と論じられている（「藤原斉信の人間像——『小右記』を中心に——」（『九州大学国語国文学会』66号、p.31））。また、村井順氏は、『小右記』『大鏡』などの記事から「我執が強かったばかりでなく、栄達主義者だったということにまちがいない。自己の立身出世のためには、同母兄であろうが先輩であろうが、蹴落としてもかまわないという、我利我利の栄達妄執者だったと想像される」（『清少納言と藤原斉信（一）』（『愛知淑徳短期大学国文学会』1972年7月、p.7））と述べられている。両論とも藤原斉信を史実から分析したものだが、彼を極めて政治的な人物として捉えているように思われる。管見の限り、斉信の記録が見える漢文史料の中で、紫式部あるいは清少納言との関係を窺わせるようなものは見当たらず、三者の関係（あるいは紫式部の対清少納言意識）を理解するのに、『紫式部日記』『枕草子』以外の資料を想定するのは今のところ難しい。だが、『紫式部日記』や『枕草子』は女房の私的な記録ではなく、それぞれの書物をバックアップしてくれる後宮サロンの権威を標榜したものであり、そして、両氏の論じられるように、斉信が極めて政治的な人物であれば、『紫式部日記』や『枕草子』という後宮の記録に書かれる意味、つまり後宮に仕える女房である紫式部や清少納言が、彼との遺り取りを書き残す意味を、積極的に読み取るべきではないかと思う。

しを、若き人などの世に知らず思へる、ことわりなりや。(332頁) 9)

この段には、「薫物の香、いとにくし」の連想によって、「五月の雨のころ」、「上の御局の小戸の簾」に寄りかかって座っている齊信から漂う香が「まことにをかし」と称賛されている。さらに翌日まで残っている余香は「若き人などの世に知らず思へる、ことわりなりや」と記される。「香の奥ゆかしさを語る時、その美の典型として清少納言の心に浮かんだのは、上の御局におけるある日の齊信の姿と、その漂わせる薫香の美」¹⁰⁾であったと評されるように、この記述から清少納言にとって齊信がいかに美しき貴公子に思われていたかが垣間見られよう。

また、次の③の引用本文には、一条帝の岩清水八幡宮行幸の折、名誉の「宣旨の御使」として供奉する齊信の姿に賛辞が送られている。

③八幡の行幸の、かへらせたまふに、女院の御棧敷のあなたに御輿とどめて、御消息申させたまふ。世に知らずいみじきに、まことにこぼるばかり、化粧したる顔みなあらはれて、いかに見苦しからむ。宣旨の御使にて、齊信の宰相中將の、御棧敷へまゐりたまひしこそ、いとをかしう見えしか。ただ隨身四人、いみじう装束きたる、馬副の、ほそく白くしたてたるばかりして、二条の大路の広く清げなるに、めでたき馬をうちはやめていそぎまゐりて、すこし遠くより下りて、そばの御簾の前に候ひたまひしなどいとをかし。御返しうけたまはりて、また帰りまゐりて、御輿のもとにて奏したまふほどなど、言ふもおろかなり。

(233～234頁)

清少納言は、「宣旨の御使」を勤める齊信が女院の御棧敷に参上する姿を「いとをかし」と述べ、また立派な装束をつけた隨身四人と白く化粧した馬副いを引き連れ少し遠くから馬をおりて、御簾の前に伺候する様子を「いとをかし」と語っている。さらには女院の御返事を承ってから、主上のもとに帰参してそれを奏上する折の様子を「言ふもおろかなり」とするなど、齊信の容姿や態度について、最上の賛辞を惜しまないのであった。こうした清少納言の齊信への傾倒ぶりは、次に引用した「返る年の二月二十余日」段（七九）にさらに克明に表われている。

④局は引きもやあけたまはむと、心ときめき、わづらはしければ、梅壺の東面、半葩上げて、「ここに」と言へば、めでたくてぞ歩み出でたまへる。

9) 『枕草子』の本文の引用は、三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本を底本とする「新編日本古典文学全集」による。ただし、私に表記や句読点など改めたところがある。なお、末尾に「新編日本古典文学全集」の頁数を付した。

10) 『枕草子大事典』（「藤原齊信」項目、岡田潔執筆）勉誠出版、2001年、p.549

桜の綾の直衣の、いみじうはなばなと、裏の艶など、えも言はずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織り乱りて、紅の色、打目など輝くばかりぞ見ゆる。白き薄色など下にあまた重なりたり。せばき縁に、片つ方は下ながら、すこし簾のもと近う寄りみたまへるぞ、まことに絵に描き、物語のめでたき事に言ひたる、これにこそはとぞ見えたる。……

暮れぬれば、まゐりぬ。……「この事どもよりは、昼斉信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまとはましくそおほえつれ」と仰せらるるに、「さて、まことに常よりもあらまほしくこそ」など言ふ。「まづその事をこそは啓せむと思ひてまゐりつるに、物語のことにまぎれて」とて、ありつる事ども聞こえさすれば、「誰も見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。(141～145頁)

清少納言の許を訪れた斉信の装束に関連して、桜の綾の直衣は「いみじうはなばな」で、その裏の艶は「えも言はずきよらなり」と称賛され、さらに指貫は「目など輝くばかり」と誉め称えられている。そしてそのように素晴らしい服装をした斉信が御簾のもとに近く寄って座っている姿は「まことに絵に描き、物語のめでたき事に言ひたる、これにこそはとぞ見えたる」と形容されている。あまりにも素晴らしい彼の姿は、一幅の絵に譬えられ、物語の中でしか出会えないような貴公子に比喻されているのである。そして、こうした斉信の姿を中宮定子に報告すると、そこに居合わせた女房達は「誰も見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる」と笑ったという。誰もが斉信の姿を見ていたけれども、縫ってある糸や針目までは見通せなかったと、清少納言の斉信に対する並大底ならぬ思い入れに感心したというのである。この記事から、清少納言の斉信への憧憬や傾斜ぶりが窺われ、さらにそれがすでに中宮定子や女房達の間で周知の事柄として認められていたということが分かる。そして、清少納言の賛美の対象になったのは、こうした斉信の容姿だけではなく、例えば次に掲げる「御殿の御ために、月ごとの十日」段（一二九）には、彼が吟誦した漢詩が礼讃されている。

- ⑤故殿の御ために、月ごとの十日、経仏など供養せさせたまひしを、九月十日、識の御曹司にてせさせたまふ。上達部、殿上人、いとおほかり。清範講師にて、説く事、はたいと悲しければ、ことに物のあはれ深かるまじき、若き人々、みな泣くめり。

果てて、酒飲み、詩誦じなどするに、頭中将斉信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふ事をうち出だしたまへりし、はたいみじうめでたし。いかできは思ひ出でたまひけむ。おはします所に分けまゐるほどに、立ち出でさせたまひて、「めでたしな、いみじう今日の料に言ひたりけることにこそあれ」とのたまはすれば、「それ啓しにとて、物見さしてまゐりはべりつるなり。なほいとめでたくこそおほえはべりつれ」と啓すれば、「まいてきおほゆるむかし」と仰せらる。

わざと呼びも出で、会ふ所ごとにては、「なかまろをまことに近く語らひたまはぬ。さす
がにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおぼゆる。かばかり年ごろにな
りぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに、明け暮れなきをりもあらば、何事をか思
ひ出でにせむ」とのたまへば、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後
には、え誉めたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにては、役と預かりて誉め
きこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくなり
はべりなむ」と言へば、「などて。さる人をしもこそ、めよりほかに、ほむるたぐひあれ」と
のたまへば、「それがにくからずおぼえばこそあらめ。男も女も、け近き人思ひ、方ひ
き、ほめ、人のいささかあしき事など言へば、腹立ちなどするがわびしうおぼゆるなり」と
言へば、「たのもしげなの事や」とのたまふも、いとをかし。(242～244頁)

道隆の追善のため経供養と仏供養が営まれた九月十日、供養が終わると斉信は、「月
秋と期して身いづくか」と吟じる。この詩は、菅原文時が謙徳公のために営まれた追善の
折に読んだ願文で、月は秋となってまた美しく照り明しているけれど、月を賞した人はいつこ
に去ってしまったのかという意だが、この斉信の吟誦を聞いていた清少納言は「はたいみじう
めでたし」と語り、「いかでさは思ひ出でたまひけむ」とその機知に感心する。そして、中
宮定子のところに参上すると、定子は「めでたしな。いみじう今日の料に言ひたりけることに
こそあれ」と、斉信が今日の供養の日のために用意したものに違いないだろうとその素晴らし
さを誉めるのであった。そして清少納言に向って「まいてさおぼゆるむかし」という言葉を投
げかけるのだが、ここには、斉信びいきのお前にはましていかに素晴らしく映ったのだろうか
という意味が込められており、清少納言の斉信への傾倒ぶりが見受けられる。ここには、斉
信のその折に合った詩句を朗詠するための心遣いと、その心遣いを理解する清少納言の姿
が描かれており、二人の心の交流が読み取られよう。さらに、清少納言が斉信によって
「わざと呼び出で」られたという記述から両者の親密さが窺われるが、とくに二人の会話の
中で彼女は「上の御前などにては、役と預かりて誉めきこゆるに」と話している。つまり、主
上の前でも斉信のことを誉めることは自分の役割となっているというのだが、当該場面から清
少納言の斉信に対する深い思い入れは勿論のこと、さらに、お互いの才知を理解し合える
二人の関係も読み取られよう。

清少納言の才学機知の披露といえば、まずあの有名な「頭中将のすずろなるそら事を
聞きて」段(七八)を避けて通れないであろう。

- ⑥頭中将のすずろなるそら言を聞きて、いみじう言ひおとし、「何しに人と思ひほめけむ」な
ど、殿上にいみじうなむのたまふと聞くにも、はづかしけれど、「まことならばこそあら
め、おのづから聞きなほしたまひてむ」と笑ひてあるに、黒戸の前など渡るにも、声など
するをりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみたまへば、ともかうも言はず、見

も入れで過ぐすに、二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて、「さすがにさうぎうしくそあれ。物や言ひやらまし」となむのたまふ、と人々語れど、「世にあらじ」などいらへてあるに、日一日下に暮らしてまゐりたれば、夜のおとどに入らせたまひにけり。長押の下に火近く取り寄せて、篇をぞつく。……炭櫃のもとにゐたれば、そこにまた、あまたる物など言ふに、「なにかし候ふ」といはなやかに言ふ。「あやし。いつのまに何事のあるぞ」と問はずれば、主殿司なりけり。「ただここも人に人づてならで申すべき事なむ」と言へば、さし出でて、言ふ事、「これ頭の殿の奉らせたまふ、御返事とく」と言ふ。……「蘭省花時錦帳下」と書いて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ、御前おはしまさば、御覽せさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。

みな寝て、つとめていとく局に下りたれば、源中將の聲にて、「ここに草の庵やある」とおどろおどろしく言へば、「あやし。などてか、人げなきものはあらむ。『玉の台』ともとめたまはましかば、いらへてまし」と言ふ。「あなうれし。下とありけるよ。上にてたづねむとしつるを」とて、夜べありしやう、「……さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いとく帰り来、『これ』とて、さし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとてうち見たるに、あはせてをめけば、『あやし、いかなる事ぞ』と、みな寄りて見るに、『いみじき盗人を。なほえこそ思ひ捨つまじけれ』とて、見さわぎて、『これが本つけてやらむ。源中將つけよ』など、夜ふくるまでつけわづらひてやみにし事は、行く先も、語りつたふべき事なりなどなむみな定めし」など、いみじうかたはらいたきまで言ひ聞かせて、「今は御名をば、草の庵となむつけたる」とて、いそぎ立ちたまひぬれば、「いとわろき名の、末の世まであらむこそくちをしかなれ」と言ふほどに、……

物語などしてゐたるほどに、「まづ」と召したれば、まゐりたるに、この事仰せられむとなりけり。上笑はせたまひて、語りきこえさせたまひて、「男どもみな扇に書きつけてなむ持たる」など仰せらるるにこそ、あさましう、何の言はせけるにかとおぼえしか。

さて後ぞ、袖の几帳なども取り捨てて、思ひなほりたまふめり。(134～140頁)

清少納言についてあらぬ噂を聞いた齊信は、彼女をたいそう言いけなして、「何しに人と思ひほめけむ」と殿上人に語るなど、しばらく疎遠になっていた。そうしたある日、雨が降り注ぐ中、齊信から「蘭省花時錦帳下」と書いて、「末はいかにいかに」とある文が届けられる。この句は『白氏文集』卷十七の「蘭雀ノ花ノ時錦帳ノ下。廬山ノ雨ノ夜草庵ノ中……」の詩によるものである。この齊信の文に対して清少納言は「草の庵を誰かたづねむ」と書き返し座中の絶賛を博した。諸注の多くは、「蘭省花時錦帳下」の対句は知るまいと思ってためたのが、それを知っていただけではなく、まともに「真名書き」で書かずさらにそれを和歌の下句に書き換えて答えたので、齊信側はその上の句を求められた格好

となり、彼女の漢籍に対する知識と機知が称賛の理由となったと解している¹¹⁾。この両者の遣り取りを通して、清少納言の答は斉信によって「行く先も、語りつたふべき事」と言われ、その漢籍の知識と機知が称賛される。そして、またさらにこの噂は宮中に広がり、一条帝までもが「男どもみな扇に書きつけてなむ持たる」と言うほどそのことを興じているのである。当該章段から、清少納言が、栄華と権勢を誇る定子サロンの代表的な存在として、当代を代表する貴公子斉信との漢詩の遣り取りをもって交流を深め、さらにそれが周囲の人々から常に注目されていたことが分かる。

清少納言は、自らが『枕草子』の中で「歌よませたまへるか。さらに見はべらじ」（「里にまかでたるに」段（八〇）、148頁）と記すなど、和歌を苦手としていたとされるが、漢籍の知識に関しては内侍典を希望するほど強い誇りを持っていた。前掲の⑤「故殿の御ために、月ごとの十日」段には藤原斉信の詩の吟誦を理解し賛美する清少納言の姿が、そして、当該章段には斉信と『白氏文集』の詩句を介して交流する清少納言の姿が描かれている。とくに、頭中将の問いに対して、「これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と記されているのは、すでに定子サロンの代表的な女房として漢籍に通じていることが宮中の中で噂となっていたからであり、その自負心の裏返しとみてよいだろう。前節で引用した『紫式部日記』の消息的部分の記述の中で、清少納言がまず批判されたのは「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり」とあったように、「真名」を書き散らしているけれども、よく見ると足りない部分が多いということであった。清少納言のみならず、紫式部もやはり漢籍に関しては人一倍自負を持っていたが、紫式部自身の漢籍に関する逸話は『紫式部日記』の中で詳細に述べられている。これに関しては次節でさらに詳細に検討するが、ここではまず紫式部が非難の矢を向けた清少納言の「真名書き」ぶり、つまり漢籍に関する教養が、『枕草子』の中で藤原斉信との交流を介して誇らしげに書き述べられていることを確認しておきたい。

『枕草子』における斉信に関して、岡崎知子氏は、端麗な容姿と才学に秀でた彼はもっぱら清少納言の賛美の対象として描かれているとした上で、斉信を称賛することによ

11) 清少納言の返事が絶賛された理由として、岡田潔氏は、斉信が問いかけた『白氏文集』の詩句は、白楽天が左遷されて廬山にある時、宮廷で華やかな生活をしている友人に詠み送ったものであり、この章段の事実があった当時（長徳元年二月）栄華の絶頂にあった中宮サロンの女房である清少納言にこの詩句を送りつけたのは、単に漢籍に関する知識を問うたものではないとする。そして「草の庵を誰かたづねむ」という清少納言の返事は、「さびしい草の庵にいる私を誰が訪ねるでしょう」という意味となり、斉信と清少納言の立場が逆転したところを読み取るべきと説かれる（「頭中将のそぞろなるそら事をききて——斉信と清少納言の応答の際の意識——」（『女子聖学院短期大学紀要』第22号、1990年、pp.68～72）。また、鄭順粉氏は、当該章段の両者の遣り取りの意味は、清少納言の句が「聯句の形式を連歌の形式へと文芸様式そのものを転位させることによって、和歌の類型化された共通観念を巧みに駆使した」ところにあると解し、さらに清少納言の返事に対して斉信達が付け句を作れなかった理由を詳細に分析されている。（「頭の中將の、すずろなるそら言を聞きて」段の和歌の方法——遊戯的な性格について——」（『枕草子 表現の方法』勉誠出版、2002年、pp.148～170）

て、「清少納言は自己を誇り、かつ二人の交渉の舞台となった中宮定子の時代を追憶し、礼讃したのである。ここに斉信の存在が清少納言の宮仕生活にもたらした意義がある」¹²⁾と述べられている。一方、田畑千恵子氏は、日記的章段と称される章段群はその各々のもつ性格が一樣ではなく、藤原斉信が登場する章段においても、史実の時期によって斉信の描かれ方が異ると論じられる。

前期章段において、中宮サロンの繁栄を保証し、また証明する存在として場面の中心を占めたのは、道隆であり伊周であった。道隆が薨去し、伊周にも昔日の栄花がみられなくなった、この時期（道隆死後の一年間）を描くにあたって、前期章段のスタイルを維持する限り、具体的な主家賛美は描けない。現実には衰退のきざしをみせる中宮サロンの「めでたさ」を描くために作者の用いた方法は、頭中将として身近にあった、美貌で才芸秀れた斉信を、素材として用い、前期章段のスタイルを踏襲しつつ、彼を中関白家側の人物として仮構し、文脈に取りこむことであった。

しかし、現実には、彼のもつ政治的位置（道隆の死後、急速に道長へ寝返った人物としての実像）を見てしまった作者には、最後まで彼を賞揚し切ることができなかったのではないだろうか。上述の三段（稿者注一「故殿の御服のころ、六月のつごもりの日」段、「故殿の御ために、月ごとの十日」段、「返る年の二月二十余日」段）は、これを反映する形で、斉信に対する意識が屈折をうかがわせるが、それは、彼のもつ政治性を十分に知りつくしている作者の目——長徳の変以降の政治の趨勢を見極めた目を感じさせる。斉信関係章段の特徴として、過去形の使用が多いこと、詠嘆的な言辞が多くみられることも合わせて、執筆時期が比較的後期であることを物語るものではないだろうか。¹³⁾

氏の論じられるように、藤原斉信関連の章段、とくに「故殿の御服のころ、六月のつごもりの日」段など道隆薨去の後の事実が書かれた章段において、「過去形の使用」「詠嘆的な言辞」が多いことをもって、果たして清少納言の斉信に対する屈折を読み取っていいのかどうか、それはさらなる検討を要するだろう。しかし、ここで重要なのは、そうした政治的な状況の中でも清少納言が中関白家への礼讃を描くために「素材」として用いているの

12) 岡崎知子氏は、「『枕冊子』における中の関白家の盛時を語る回想的、叙事的章段にみられる中宮礼讃と宮廷生活の謳歌とは、同時にそこに生活する女房清少納言自身のわれいぼめでもある。清少納言の宮仕生活中特筆すべき事柄は皆、『一つな落としそ』と励まされて、自他の区別なく記しとどめたものようである。その中で清少納言が殿上人等を相手に秀句や諧謔にみちた問答をする時、彼女の面目は最も躍如たるものがある。そして斉信もまたその殿上人の一人として、云わば清少納言の引立て役を演じ、おおいに彼女の機知を誘発した。この斉信を称賛することにおいて清少納言は自己を誇り、かつ二人の交渉の舞台となった中宮定子の時代を追憶し、礼讃したのである。ここに斉信の存在が清少納言の宮仕生活にもたらした意義があるように思う。」と述べられている。「『枕冊子』に見える藤原斉信」（『古代文化』第15巻 第1号、1965年、p.24）

13) 田端千恵子「枕草子・藤原斉信関係章段の位相——「故殿の御服のころ」「故殿の御ために」の段を中心に——」（『中古文学論攷』第四号、早稲田大学大学院中古文学研究会、1983年、pp.33～34）

が、すでに道長の右腕として活躍し重用されている斉信であったという事実である。清少納言の心情、あるいはその意図はともかく、『枕草子』が流布し同時代の人々に読まれた場合、このことがいかに受け止められるのかという問題がまたここに生じるのである。ましてや中宮彰子サロンに仕え、さらに『枕草子』（あるいは清少納言）に対して強烈な対抗意識を持っている紫式部にとって、『枕草子』の中で繰り広げられる定子サロンを舞台にした斉信の活躍は、どのように受け止められていたのであろうか。また、『紫式部日記』の中でどのような形で反映されているのだろうか。次節でさらに検討を進めていきたい。

三 『紫式部日記』の中の藤原斉信

道長の右腕として重用された藤原斉信は、彰子の立後にあたり中宮大夫に任ぜられるが、『紫式部日記』においても「宮の大夫」「大宮の大夫」「大夫」「大納言」と称されている。その登場回数は、中宮彰子や道長、あるいは紫式部が親しくしていた何人かの女房を除けば、男性貴族としてはもっとも多く、十一回を数える。その登場回数だけをみても、『紫式部日記』の主要人物の一人であったといえよう。それではまず斉信がどのように描かれているのかを見ていきたいと思う。次は寛弘五年、彰子の出産を前にして公卿達が土御門に集って待機している場面である。

⑦八月二十余日のほどよりは、上達部、殿上人ども、さるべきは、みな宿直がちにて、橋の上、対の簀子などに、みなうたた寝をしつつ、はかなうあそび明かす。……宮の大夫 斉信、左の宰相の中将経房、兵衛の督、美濃の少将済政などして、遊びたまふ夜もあり。わざとの御遊びは、殿おぼすやうやあらむ、せさせたまはず。 (127頁)

ここには、彰子腹の第一子の誕生に待機する公卿達の様子が描かれているが、その場には「宮の大夫」である斉信も列席している。若宮が誕生してからも斉信は道長邸の行事にほとんど出席し慶事に花を添えているのだが、それは「宮の大夫」という職掌、あるいは主家と斉信との位置関係を考えると当然といえば当然かも知れない。しかしここで重要なのは、一見当然のように見える彼の列席を紫式部が省略することなく悉く記し残しているということである。例えば、次の引用文は、若宮（しかもそれが将来の天皇となる親王）が誕生し喜び合う場面だが、ここで斉信は、「宮の大夫、ことさらにも笑みほこりたまはねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる」とあり、殊更に喜ぶ姿が描かれている。

⑧例の、渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の大夫、東宮の大夫など、さらぬ上達部も、あまたさぶらひたまふ。……心のうちに思ふことあらむ人も、ただ今は、まぎれぬべき世のけはひなるうちにも、宮の大夫、ことさらにも笑みほこりたまはねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる。(136～137頁)

この場面に、宮大夫と東宮大夫の名が列記されていることに対して、守屋省吾氏は、「多数の公卿達が居集まるその中から特にこのふたりに視線を止めているところは、主家に対する両者の位置関係を意識していたればこそであり、眼前に展開するそれ自体どういふこともない人物情景を、常に過去から現在へと流れる時間によって相対化して認識・評価しないではおかない筆録者の批評精神のなせる業であり、ひいては主家の権勢を強く意においている筆録者の心情をはしくも表現する結果にもなっていよう」¹⁴⁾と述べられている。氏は、齊信の出自が極めて高く、道長の繁栄に多少なりとも嫉妬の念を抱いていたかも知れないという意味から、常に過去の歴史を認識する紫式部が、その名をとりわけ記している可能性を示唆されているのである。だが、氏の述べられるように、紫式部が「人物情景を、常に過去から現在へと流れる時間によって相対化して認識・評価」する「批評精神」を持っているとするならば、そこには自ずとつい最近まで道隆に重用され、定子後宮に出入りしながら交流を深め、『枕草子』という書物を通して今もお当時の様子が語り伝えられている齊信、という意識が入り込んでいる可能性も排除できまい。というのは、『紫式部日記』における齊信の描かれ方は、ただ慶事に顔を出し、その名前が単なる記録として書き残されたというレベルに留まるものではないからである。

⑨暮れて、月いとおもしろきに、宮の亮、女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあらむ、妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の内侍の局に立ち寄りて、「ここにや」と案内したまふ。宰相は中の間に寄りて、まだささぬ格子の上押し上げて、「おはすや」などあれど、出でぬに、大夫の「ここにや」とのたまふにさへ、聞きしのばむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなどす。いと思ふことなげなる御けしきどもなり。「わが御いらへはせず、大夫を心ことにもてなしきこゆ。ことわりながらわろし。かかるところに、上臈のけちめいたうは分くものか」と、あはめたまふ。……(160～161頁)

上は、若宮関係の人事が定められ、その夜、「宮の亮」と「宮の大夫」が紫式部の局に立ち寄る場面である。ここでの「宮の亮」というのは、中宮の権の亮、つまり藤原実成のことだが、実成が式部に声をかけるも、式部はそれに対して返事をしようとしな。しか

14) 守屋省吾「『紫式部日記』小考——人名記述に関連して——」（『王朝女流文学の新展望』伊藤博・宮崎莊平編、竹林舎、2003年、p.84）

し、その時、「宮の大夫」つまり齊信が訪ねてくると、式部はどうすることもできず対応したというのである。この場面は、実成が「わが御いらへはせず、大夫を心ことにもてなすきこゆ。ことわりながらわろし」と述べているように、まずは高位官職にある齊信のことは、男性貴族との付き合いに消極的である紫式部でさえ無視するわけにはいかなかった、というふうにはまず解されよう。しかしそれと同時に、齊信の存在は彰子サロンにおいてそれだけ重いものであったとも理解できるのではないだろうか。そして、『紫式部日記』には、中宮彰子の慶事を取り仕切る「宮の大夫」として齊信の顔もしっかりと書き記されている。

⑩御五十日は霜月の朔日の日。例の、人々のしたててまうのぼりつどひたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとよう似てはべりし。……内裏の台盤所にもてまるるべきに、明日よりは御物忌とて、今宵みな急ぎてとりはらひつつ、宮の大夫、御簾のもとよりまわりて、「上達部御前に召さむ」と啓したまふ。聞こしめしつとあれば、殿よりはじめたてまつりて、みなまわりたまふ。……大納言の君、宰相の君、小少将の君、宮の内侍とゐたまへり。右の大臣よりて、御几帳のほころび引きたちみだれたまふ。さだすぎたりとつきしろふも知らず、扇をとり、たはぶれごとのはしたなきも多かり。大夫、かはらけとりて、そなたに出でたまへり。美濃山うたひて、御遊び、さまばかりなれど、いとおもしろし。
(162～164頁)

上は、若宮の御五十日の祝が行われる場面だが、それは「人々のしたててまうのぼりつどひたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとよう似てはべりし」とあり、美しく着飾った女房たちが参上し集った中宮彰子の様子が、まるで絵に描いた物合せの場面のようにと最上の賛辞を呈している。そして、その美しい場を切り盛りするのが「宮の大夫」つまり齊信なのだが、「宮の大夫」として将来の天皇の御五十日という慶事を仕切る様子が事細かく書かれているというのは、単なる記録を越えて、時の権勢に与したその栄華に参画したということに繋がることを意味しよう。こうして齊信は、『紫式部日記』に繰り返す栄華の絶頂にあった彰子方の「宮の大夫」としてその名を刻まれ、その記述を通して道長という主家に属する人物として新たに創り直されていく。一見して当然と見受けられる事柄は、一方では省略して差違えないという意味にも通ずる。しかしそれが省かれることなく書物の中に悉く書き込まれていくというのは、少なくとも筆録者にとっては、当然と思われるその事に対して重い意味があるからである。そしてそれが繰り返す書き記されることによって、読者は、そこに重要な意味性を読み取ることになるのである。齊信は中宮彰子の「宮の大夫」であり、親王誕生などの慶事に出席して当然の人物だが、その当然の人物の列席を悉く書き記し、そして論評を付け加える、そこに『紫式部日記』の意図が見え隠れするのではないだろうか。また、こういうところにこそ『紫式部日記』の単なる記録日記ではなく日記文学としての意義があろう。

『枕草子』で清少納言との交流を通じて、清少納言を引き立て、さらには定子サロンの華やかさを引き立てていた齊信は、こうして、中宮彰子の「宮の大夫」として、その栄華を見届け、そしてその栄達に参画する人物として『紫式部日記』に書き刻まれていく。そして今度は彰子サロンの優秀さを保証する人物として創り直されるのである。そして、先述したように、『枕草子』にはとくに清少納言と齊信の漢詩を介した交流が印象深く描かれていたが、『紫式部日記』においてもそれを髣髴とさせるような場面が叙述されている。

⑪十一日の暁、御堂へ渡らせたまふ。御車には殿の上、人々は舟にのりてさし渡りけり。それにはおくれて、ようさりまゐる。教化おこなふところ、山、寺の作法うつして大懺悔す。しらいたうなど多う絵にかいて、興にあそびたまふ。上達部、多くはまかてたまひて、すこしぞとまりたまへる。後夜の御導師、教化ども、説相みな心々、二十人ながら宮のかくておはしますよしを、こちかひきしな、ことば絶えて、笑はることもあまたあり。

事はてて、殿上人舟にのりて、みな漕ぎつづきてあそぶ。御堂の東のつま、北向きにおしあけたる戸のまへ、池につくりおろしたる階の高欄をおさへて、宮の大夫はゐたまへり。殿あからさまにまゐらせたまへるほど、宰相の君など物語して、御前なれば、うちとけぬ用意、内も外もをかしきほどなり。

月おぼろにさし出でて、若やかなる君達、今様歌うたふも、舟にのりおほせたるを、若うをかしく聞こゆるに、大蔵卿のおほなおほなまじりて、さすがに、声うち添へむもつつましきにや、しのびやかにてゐたるうしろでの、をかしう見ゆれば、御簾のうちの人もみそかに笑ふ。「舟の中にや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけたまへるにや、大夫、「徐福文成誑誕多し」と、うち誦じたまふ声も、さまも、こよなういまめかしく見ゆ。

「池の浮草」とうたひて、笛など吹きあはせたる、暁がたの風のけはひさへぞ、心ことなる。はかないことも、所がら折がらなりけり。

(213～214頁)

土御門で開かれた盛大な船樂が終わると、殿上人は皆舟を漕ぎながら管絃の遊びをしている。そして「御堂の東のつま、北向きにおしあけたる戸のまへ、池につくりおろしたる階の高欄をおさへて、宮の大夫はゐたまへり」とあるが、この文は、場所を表わす長い副詞節を前に置いて、そこにいるのが誰かという、他ならぬ「宮の大夫」であった、という構成になっており、「宮の大夫」の存在がとくに強調されたものとなっている。これはもちろん、後に紫式部の吟誦した詩句を、齊信がよくも聞き取り、その下の句を諷誦し応酬してくれた、という流れを作るためのものであろう。紫式部は、若い公達の中に年老いた大蔵卿がまじっているのを見て「舟の中にや老をばかこつらむ」と発する。周知のように、これは『白氏文集』巻三・新樂府の中の「海漫漫」の一句に「童男舁女舟中ニ老ユ」とあるのを踏まえたもので、秦の道士徐福が不老不死の薬を求めて蓬萊に向かったが、蓬萊に至らぬうちに随行していた童男舁女が舟中で老いたという故事を、年老いた舟中の大蔵卿になぞら

えたものである。この紫式部の言葉を聞いた齊信は、それが「海漫漫」の詩に拠ったものであることに気づき、「徐福文成誑誕多し」とその続きの句を誦し、式部に応えるのであった。さらに、こうした齊信の応対に対して式部は「さまも、こよないまめかしく見ゆ」と賛辞を送っている。この場面对して、妹背好信氏は、「これはあたかも『枕草子』の一齣のようではなからうか。紫式部はここで、漢籍の知識をひけらかすと言ってあれほど非難した清少納言とそっくりな振舞をしているのである。」¹⁵⁾と論じ、漢籍の知識を誇示するという点において『枕草子』と同様の趣向であると説かれている。氏も論じられているように、当該場面は、男性貴族と漢詩を介して交流し、その相手を称賛することによって、けっきょく自分自身を引き立て、ひいては自分が属している後宮の文化の高さを賞揚することに繋げるという点において、『枕草子』の前掲引用本文⑥「頭中将のすずろなるそら事を聞きて」段に酷似しているといえよう。しかしここでさらに考えるべきは、その相手の男性貴族が取りも直さず藤原齊信であったということである。これはやはり『紫式部日記』における齊信という人物の描かれ方に、対『枕草子』意識が底流していたことを意味するのではないだろうか。

ここで、第二節で検討した『紫式部日記』における清少納言批判を思い起こしてみよう。先述した通り、清少納言があれほど手厳しい批判を受けたのは、「さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば……」と、主に「真名書き」を書き散らし、「人に異ならむ」とする性質であった。福家俊幸は、紫式部は、散文作家という共通点の上に、漢籍に造詣が深いという点においても「新しいタイプの女房として、清少納言と近似の存在として受け取られた」だろうと推定される。そして清少納言批判文の意義について、「清少納言との異質性を強調し、清少納言とは異なる自像を打ち立てることが、自己アイデンティティの確立となっていたように思われる。その背後には、作者を清少納言と類同的な存在と見ようという周囲の眼が存在していたのであり、作者は自らを対置することで、一旦は清少納言の盛名を利用しながら、最終的には清少納言とは異質な存在としての自像を据えた」¹⁶⁾と論じられている。『紫式部日記』の手厳しい清少納言批判が、漢籍の教養を誇る散文作家としての矜持に基づくという点において、示唆するところが大きい。そして、紫式部が、清少納言に対して辛辣な批判を展開するに至ったその対象が、まずは『枕草子』に散見する「よく見れば、まだいと足らぬこと多」い「真名」を

15) 前掲妹背好信論文、p.8。氏は「これはあたかも『枕草子』の一齣のようではなからうか。紫式部はここで、漢籍の知識をひけらかすと言ってあれほど非難した清少納言とそっくりな振舞をしているのである。この大いなる矛盾は、紫式部が実は本質的に清少納言と同類の人物であり、『枕草子』の中の清少納言に潜在的な憧れを抱いていたから生じたものではないかと思う。紫式部の清少納言批判の言葉に、言いようもない力みが感じられるのは、それが相当な痩せ我慢に基づいていたからだと思えてならないのである」と述べ、清少納言と紫式部の共通性を説かれている。

16) 福家俊幸「『紫式部日記』いわゆる三才女批評の位相」（『平安文学の風貌』武蔵野書院、2003年、p.319）

書き散らすところであり、そしてそうした清少納言の機知を誘発し引き立てる相手として藤原齊信が描かれていたとすれば、『紫式部日記』において齊信が多くの場合に登場し、また紫式部の漢籍の知識を導き出し称賛する人物として現われているというのは、決して偶然ではないだろう。それは、『枕草子』を著した清少納言に対して強い対抗意識を持っている紫式部が、『枕草子』の中で清少納言の優秀さを引き立てた貴公子藤原齊信を、今度は『紫式部日記』の中で自らの優位を証明する貴顕として描き直すことによって、『枕草子』の世界を否定することになるということではないだろうか。そして先述したように、『紫式部日記』や『枕草子』が一介女房の私的な記録ではなく、それぞれが属している後宮を賞揚するためのものであることを考え合せると、それは定子サロンを否定し、自らが属する彰子サロンの優位性を確立することにも繋がるだろう。

そして、このように、『紫式部日記』における藤原齊信の描かれ方を検討していくと、清少納言批判へと続く消息的部分の中で、後宮サロンを批評する人物として見える齊信の意味も捉え直されよう。消息的部分での齊信の登場は、その一連の記事のクライマックスともいべき清少納言批判を射程に入れたものと考えられるのではなかろうか。つまり、紫式部は、貴公子との交流を『枕草子』という書物に描くことによって、かつての定子サロンの栄華を今なお世に伝える清少納言を念頭に置いて、昔日の定子サロンを知り尽くし後宮サロンの文化を具体的に語り得ると同時に、さらに今となっては彰子サロンの権勢や栄達に参画している人物として、藤原齊信を描き続けていたのである。

五 むすびにかえて-日記文学というもの-

『紫式部日記』に『枕草子』に対する対抗意識が顕著であるということは、従来よく言われることである。それは、『紫式部日記』の消息的部分に清少納言に対する辛辣な批判が述べられていることがもっとも大きな原因であろう。本稿では、その清少納言批判に至るまでの消息的部分が連動して書き進められていることに注目し、その中で後宮サロンを具体的に批評する人物として藤原齊信が登場している意味、さらには『紫式部日記』全体における齊信の描かれ方を『枕草子』と関連づけながら検討してきた。

『枕草子』には藤原齊信との交流が描かれ、清少納言は彼に対して常に最上の賛美を呈するのだが、彼に贈られた称賛は、すなわち彼女自身の才知を引き立て、さらには中宮定子のサロンを輝かせることに繋がっていた。そして『紫式部日記』にもやはり藤原齊信のことが多く描かれているのだが、それは彼が中宮彰子の「宮の大夫」であったという職掌に加え、『枕草子』を意識してのものであったと思われる。それは、例えば漢籍の知識に関わる記事によってさらに鮮やかに浮き上がる。紫式部は、かつて清少納言との交流を通し

て定子サロンの栄華を世に伝えた役割をしていた藤原齐信を、今度は『紫式部日記』において彰子サロンの一員として描き直すことによって、定子サロンを否定し彰子サロンの優越性を世に知らしめたのではないかと思う。

『紫式部日記』のジャンルは何だろうか。あるいは、〈日記文学〉の定義は何であろうか。これは稿者をして『紫式部日記』を読むたびに考えさせる課題である。それはまずは『紫式部日記』が『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』『更科日記』など他の日記文学作品とその形態が大いに異なるためである。つまり、敦成親王の誕生に関わる部分は他の作品に比して極めて記録的でありつつも、また「消息文」ともいわれる部分においては「消息文」という名称がすでに物語るように、極めて自己省察が多く物語性が強いいため、敦成親王関連の記事などとはまったくその性格を異にしているのである。故に稿者にとっては、『紫式部日記』のジャンル、あるいはその有り様を考えるにあたって、どの部分を基準にして判断すればいいものか極めて難しい問題であった。しかし、本稿で検討してきたように、例えば藤原齐信関連の記事を分析してみると、それが記録的な部分であったとしても、実録とは違って、そこには〈書き記す〉ことによって新たに持たされる意味があり、さらにそれは『紫式部日記』という作品全体を通じて連動しているということが、微妙でありながらも見えてきたのではないかと思う。紫式部の意識を通り越して、そこにこそ〈日記〉ではなく我々が〈日記文学〉と称する意味が存するのではなからうか。

【参考文献】

- ・妹背好信 (1993) 「後宮プロバガンダとしての『紫式部日記』——その対『枕草子』意識——」 (『国語の研究』第十八号、大分大学国語国文学会、pp.2~5)
- ・上村悦子 (1975) 「清少納言と紫式部」 (『王朝女流作家の研究』1975年、笠間書院、p.232)
- ・大橋清秀 (1990) 「紫式部日記にみえる清少納言について」 (『帝塚山学院大学研究論集』第25集、帝塚山学院大学、pp.1~16)
- ・岡崎知子 (1965) 「『枕冊子』に見える藤原齊信」 (『古代文化』第15巻 第1号、p.24)
- ・岡田潔 (1990) 「頭中将のそぞろなるそら事をききて——齊信と清少納言の応答の際の意識——」 (『女子聖学院短期大学紀要』第22号、pp.68~72)
- ・岡田潔 (2001) 「藤原齊信」 (『枕草子大事典』勉誠出版、p.549)
- ・田端千恵子 (1983) 「枕草子・藤原齊信関係章段の位相——「故殿の御服のころ」「故殿の御ために」の段を中心に——」 (『中古文学論攷』第四号、早稲田大学大学院中古文学研究会、pp.33~34)
- ・豊田芳子 (1995) 「紫式部日記小考——「清少納言批判文」の存在をめぐって——」 (『王朝日記の新研究』笠間書院、p.572)
- ・鄭順粉 (2002) 「頭の中將の、すずろなるそら言を聞きて」段の和歌の方法——遊戯的な性格について——」 (『枕草子 表現の方法』勉誠出版、pp.148~170)
- ・中野幸一 (1994) (『紫式部日記』「新編日本古典文学全集」解説、pp.243~244)
- ・福井迪子 (1989) 「藤原齊信の人間像——『小右記』を中心に——」 (『九州大学国語国文学会』p.31)
- ・福家俊幸 (2003) 「『紫式部日記』いわゆる三才女批評の位相」 (『平安文学の風貌』武蔵野書院、p.319)
- ・村井順 (1972) 「清少納言と藤原齊信 (一)」 (『愛知淑徳短期大学国文学会』p.7)
- ・守屋省吾 (2003) 「『紫式部日記』小考——人名記述に関連して——」 (『王朝女流文学の新展望』伊藤博・宮崎莊平編、竹林舎、p.84)
- ・山本淳子 (2001) 「『紫式部日記』清少納言批評の背景」 (『古代文化』第53巻第9号、古代学協会、p.31)

要 旨

『紫式部日記』に『枕草子』に対する対抗意識が顕著であるということは、従来よく言われることであった。それは、『紫式部日記』の消息的部分に清少納言に対する辛辣な批判が述べられていることがもっとも大きな原因であろう。本稿では、その清少納言批判に至るまでの消息的部分が連動して書き進められていることに注目し、その中で後宮サロンを具体的に批評する人物として藤原齊信が登場している意味、さらには『紫式部日記』全体における齊信の描かれ方を『枕草子』と関連づけながら検討している。

『枕草子』には藤原齊信との交流が描かれ、清少納言は彼に対して最上の賛美を呈するのだが、彼に贈られた称賛は、彼女自身の才知を引き立て、さらには中宮定子のサロンをさらに輝かせることに繋がっていた。そして『紫式部日記』にもやはり藤原齊信のことが多く描かれているのだが、それは彼が中宮彰子「宮の大夫」であったという職掌に加え、『枕草子』を意識してのものであったと思われる。それは、例えば漢籍の知識に関わる記事によってさらに鮮やかに浮き上がる。紫式部は清少納言批判文において清少納言の漢学の教養を見せびらかすような態度を非難しているが、実は紫式部も清少納言のように自身の漢学の教養に対して異常なまでの自負を持っていた。そして、『枕草子』には藤原齊信との漢詩の遣り取りが書かれているが、『紫式部日記』においてもやはり齊信との漢詩の応酬が描かれており、これもやはり対『枕草子』意識によるものではないかと思うのである。

紫式部は、かつて清少納言との交流を通して定子サロンの栄華を世に伝えた役割をしていた藤原齊信を、今度は『紫式部日記』において彰子サロンの一員として描き直すことによって、定子サロンを否定し彰子サロンの優越性を世に知らしめたのではなかろうか。

キーワード： 『紫式部日記』、『枕草子』、紫式部、清少納言、藤原齊信

투 고 : 2008. 5. 31

1차 심사 : 2008. 6. 13

2차 심사 : 2008. 6. 27